

分娩と子宮筋腫： とるべきか，とらざるべきか？

上田 豊¹⁾／谷口 友基子²⁾／大八木 知史³⁾／
吉野 潔⁴⁾／木村 正⁵⁾

Summary

子宮筋腫は女性に最も高頻度に見られる腫瘍であり，挙児希望のある女性に筋腫を認めることも多い。筋腫は妊娠中に必ずしも大きくなるとは限らず，また筋腫核出術後の妊娠では筋腫合併妊娠より帝王切開率・早産率が有意に高く，また分娩時出血量も有意に多くなる可能性がある。筋腫核出術は，ほかに原因を認めない不妊症例を含め，手術を要する症状が認められる場合に適用されるべきものであり，症状のない漿膜下筋腫や筋層内筋腫に対する妊娠前の筋腫核出術の実施には慎重になるべきである。

Key words

筋腫
無症状
妊娠
核出術
周産期予後

はじめに

子宮筋腫は女性に最も高頻度に見られる腫瘍である。昨今，女性の妊娠・分娩年齢の上昇に伴い，妊娠に筋腫が合併してさまざまな合併症を引き起こす症例も多くなっている¹⁾。また，挙児希望のある女性に筋腫を認めることも多くなり，妊娠前に核出術を行うべきか迷う症例も少なくない。本稿では，挙児希望のある女性における症状のない筋腫の核出術について論じる。

妊娠が筋腫へ与える影響

筋腫は妊娠中にはエストロゲン分泌の上昇に伴って大きくなるという印象をもっておられる方も多いかもしれない。しかし，これまでの報告を総合すると，妊娠中に増大するのは30%程度であり，約50%は妊娠中には大きさは変わらず，縮小する筋腫も約20%程度存在する²⁾³⁾。すなわち，妊娠は筋腫の大きさに関して，必ずしも悪影響を与えないとは限らない。したがって，妊娠中に大きくなってしまったことのみを懸念して妊娠前に核出術を考慮することは必ずしも必要ではないと考えられる。

筋腫が妊娠に与える影響

筋腫が不妊や流産の原因になる場合があり，そのような症例では筋腫核出を行うことで妊娠率の上昇や流産率の低下が期待される。これについて

Yutaka Ueda, Taniguchi Yukiko, Chifumi Ohyagi,
Kiyoshi Yoshino, Tadashi Kimura

大阪大学大学院医学系研究科産科学婦人科学
講師¹⁾，准教授⁴⁾，教授⁵⁾，
医療法人社団衣笠会産科婦人科衣笠クリニック²⁾，
JCHO 大阪病院産婦人科医長³⁾